



令和6年3月25日発行
 第36号
 二本松市農業委員会
 ☎0243-55-5148(直通)

いぶき

3年ぶりに通常開催!!「木幡の幡祭り」

昨年12月3日に東和地域木幡地区で「木幡の幡祭り」が3年ぶりに通常開催されました。

このお祭りは源頼義・義家らによる陸奥征伐の故事をもとに続いてきており、現在では成人の儀式や地域の五穀豊穰を祈るお祭りとなっています。

地元の農業委員であり、幡祭りでの総大将を務めた武藤栄利さんは、

「今回の祭りでは権立(祭りに

初めて参加する成人の儀式対象者の参加者が多く、活気があつてよかった。来年もにぎやかに開催していきたい。

伝統ある祭りなので永く続けていきたい。」と話してくれました。

木幡の幡祭りは毎年12月の第一日曜日に開催されており、令和6年は12月1日に開催予定となっていますので、ぜひご覧になってください。



▲総大将・大将と権立



▲神社で整列する祭りの参加者たち

▼晴天のもと青空にたなびく幡



地域農業の発展に貢献



このほど、二本松市太田の佐藤佐市さん・洋子さんご夫妻が、第64回福島県農業賞を受賞されました。



▲佐藤佐市さん

佐藤さんは高校卒業と同時に家業の農業を継ぎ、結婚後は妻の洋子さんと共に、有機農業に取り組んできました。
佐藤さんは、東和地域における有機栽培の先駆者であり、栽培はもとより、販路の拡大も一からのスタートであったとのこと。
ここにたどり着くまでには数多くのご苦労や挫折、災害による被災もありましたが、持ち前の行動力と誠実な姿勢、そして妻の洋子

さんの支えがあり、有機野菜・菌床椎茸、野菜苗の販売と、安定した複合経営にいたっています。



▲ハウスで栽培中のナス苗

その中でも国土館大学の教授と学生との出会いは、佐藤さんにとっても貴重な経験であったそうです。

「西谷学校」と名付けられたその交流は、20人ほどの教授・学生達と地域の方とで、田植え、草取り、稲刈り、収穫など年間を通じて行われました。

また、佐藤さんは新規就農者の受け入れ、育成にも尽力されており、これまでに10数人の研修生に、

長年培った農業技術等を丁寧に教えています。
今では、佐藤さんの元で研修を受けた方のうち7人の方が地域内に定住して農業を営んでいます。
中には、消防団員や地区の役員として地域に溶け込んで活躍している就農者もいます。



▲西谷さとう農園の看板前で

中山間地という決して恵まれた環境ではありませんが、地域の特性を生かし、人々との交流を大切にしながら有機農業に取り組む、さらには新規就農者の育成など、多岐にわたり取り組まれてきた佐藤さんご夫妻のますますのご活躍と、地域農業が集落全体で発展していくことができるよう期待します。

(石川重彦委員)

二本松市長へ 意見書提出

昨年10月31日に奥平貢市会長、野地太郎会長職務代理者、武藤一夫幹事長の3人で、三保恵一市長に農地利用の最適化の推進に関する意見書を提出しました。

意見書の内容

(新規箇所のみ抜粋)

1 担い手への農地集約
地域ごとの実情を反映し、地域に根ざした「地域計画」を策定すること。



▲左から武藤幹事長、奥平会長、三保市長、野地職務代理

令和5年度 福島県下農業委員会大会

令和5年11月9日(水)
福島市パルセイイざか

県内全域の農業委員会委員参加のもと福島県農業会議の県下農業委員会大会が開催されました。主催者挨拶として代表理事会長の鈴木理会長よりあいさつがありました。



▲挨拶する鈴木理会長

続いて各種表彰が行われ、第40回農業委員会情報紙コンクール表彰が発表され、福島県農業会議会長賞最優秀賞および福島県知事賞の両部門に見事二本松市の「いぶき第33号」が受賞の栄に輝くことができ、これにより県代表として全国大会へ出品されることが決まりました。続きまして来賓の福島県知事より祝辞が述べられました。



▲表彰を受ける松本太広報委員長

また、記念講演では、講師に福島大学の食農学類教授原田英美氏を迎え、福島大学の食農実践型教育と学生から見た福島県の農業・農村の魅力について講演がありました。

講演では、大学生の林咲也香さんと千田晴加さんの2人も登場し、教授との対話形式によりイイタテベイクという名前の飯舘村特産ジャガイモを地域資源として村の賑わいづくりを生かしていくという説明があり、農業・農村の持続的発展や過疎化対策の積極的な取り組みとして大変参考になりました。

最後に、農産物の輸出振興等の対策強化を更に求めていくという申し合わせについて決議し閉会しました。

(佐藤洋三委員)

令和5年度 農業委員会視察研修

生産から加工まで！
さつまいも専門農園「ニチノウ飛田」

最近、さつまいもに関する話題をよく見聞きするようになりました。

さつまいもの栄養価、多様性はもちろんですが、温暖化や品種改良等により、比較的広範囲で作付けができるようになってきたこともその理由かと思えます。

このほど、茨城県ひたちなか市の農業生産法人株式会社「ニチノウ飛田」を視察する機会がありました。



▲工場内での視察の様子

さつまいも専門農園である「ニチノウ飛田」は、約20haの農地に、「紅はるか」を栽培しており、自社栽培の完熟さつま芋(約50t)を、日本人7割

外国人3割の作業員50人ほどで加工作業を行っていきます。

「ニチノウ飛田」の特長は、石造りの蔵で追熟させることにより、濃厚な甘みと爽やかな後味、ねっとりとした柔らかさの干し芋に仕上がることです。

視察させていただいた時は、蒸したさつまいも皮を一本一本丁寧にむいている作業を見学することができました。

試食させていただいた干し芋は、なるほど！と思わせるおいしさでした。

(石川重彦委員)



▲1本ずつ丁寧に皮むき



員 会 視 察 研 修

野菜たっぷりの昼食をいただき、食事後にリンドトマコファーム代表の石毛真理子さんにお話をお伺いしました。

とまりこ食堂を運営されているリンドトマコファームは、『銚子の農園から、美味しい野菜』と『美味しい時間』を届けます。『をキャッチフレーズに活動されています。』

石毛さんは、「食べることは、自分たちの健やかな生活の基盤



▲とまりこ食堂外観

研修1日目の昼食と視察研修を兼ねて千葉県銚子市お野菜クリニック「とまりこ食堂」にお邪魔しました。

野菜の魅力と美味しさで「からだ」と「こころ」を元気に



▲食堂内での研修の様子

です。だからといって健康のために無理をしたり、特別なことをするのではなく、取り入れやすい方法などで続けられることが大切だと考えています。

おいしい食事は『自分の心と体に向き合う』『人との会話を作るきっかけ』になると思っています。

野菜を食べて1人でも多くの方々が健やかな気持ちで明日を迎えられるように、おいしい野菜と時間をつくっていききたいです。」と話してくれました。

▶とまりこ食堂の特製ドリンク

▼今回いただいた昼食



また、レストラン事業では、地元産にこだわって、食材のうまみや栄養価が一番高くなる「旬」の食材を選び、野菜たっぷりのメニューを提供されています。

石毛さん自身も体調が良くないことがあったそうですが、『「マクロビोटイック」と出会い食生活を改善することで、体調不良が良くなりました。』

この件がきっかけで、『旬の野菜や地元食材を使った料理で、不調を抱える多くの人に健康になってもらいたい。』という思いが募りレストランをオープンされたそうです。

今回は食事における野菜の大切さ、料理の仕方素材のおいしさを引き出すことができ、健康で心豊かな体作りや楽しい会話をするきっかけを作り出せることを学びました。

皆さんが大切に作っている野菜が一番です、みんなで野菜生活を大事にしていきましょう。

(佐藤孝委員)



▲とまりこ食堂の皆さんと

令和5年度 農業委

茨城県石岡市

「朝日里山ファーム」を研修して

「朝日里山ファーム」は平成29年に開設した新規就農者を育てる研修農場で、設置の目的は「農業により移住者を増やすこと」とのことです。

石岡市がNPO法人アグリやさとともに管理運営を委託しています。



▲NPO法人アグリやさとの柴山さん

廃校になった小学校を利用し、近くの遊休農地1・4haを開墾して体験型観光施設と有機農業の圃場を整備しました。

農場にはビニールハウス2棟、ハウス倉庫1棟、トンネル等農業資材、トラクター、管理機、刈払機2台、草刈機、作業所備品などの設備や機材が整っています。

また、就農指導員が丁寧なサポートも行っていきます。

そのほか住宅や農地をあつせんして研修生の独立のためにあらゆる面でのサポートも行っていきます。



▲研修の様子

毎年45歳以下の夫婦1組を研修生として受け入れ、2年間有

機農業の研修を行っています。

研修1年目は生産指導担当者の指導を受け、研修生自身で生産計画を作成して、計画に基づき野菜の生産を開始します。なお、圃場は朝日里山ファームで準備します。

2年目は1年目の学びから自分に合った作物を選定、農地を借りる段取りから始めます。

地域独立に備え、研修と同時に、農地や住居の準備を進め、作業室と圃場履歴等を次の研修生に渡します。2年目が最も忙しい時期となります。

独立時の耕作面積は80aから1haですが、数年後には1・5haから2haまで面積を増していることもあります。

研修を受ける方の年齢は20代から30代が中心で、JAやさと有機栽培部会員の5分の4が新規就農者で26世帯が移住しています。

課題もあり、借入する圃場と独立時の住居とのマッチングが一番の問題点となっています。

廃校の活用では観光・体験会など年間3000人が訪れ、地元の高齢者の皆さんが対応に当たっています。

石岡市は都心からも近く、温暖な気候と平坦な農地が広がり、さらに「朝日里山ファーム」という素晴らしい施設があり、新規就農を始めるのにはとても良い環境だと感じてきました。
(遠藤康子委員)



▲朝日里山ファームの看板前で



「お米づくしは生命をつくる仕事」

「東和小学校5年生「田んぼの学校」がスタート」

「田んぼの学校」が東和地域の布
沢棚田で始まりました。

この企画は、「食べ物への命の大切さ」「自然と生き物の大切さ」「人とのつながりの大切さ」を学ぶ農業体験学習として、布沢集落・布沢の環境を守る会の皆さんの協力で行われました。田んぼの学校長には棚田の所有者の菅野金一さんが就任して米づくりの指導をしていただきました。

5月の田植え

「初めはゆるゆる気持ち悪かったけど、なれてくると楽しい！」

5月26日に東和小学校での田んぼの学校の開校式のあと、5年生が田んぼに入りました。初めて田植えをするという児童が多く、最初はおそるおそる入っていました。慣れてくると「苗をちようだい！」と元気な声が聞こえてきます。「これはヤモリですか？」との声に布沢集落の方が「そうだ、アカハラヤモリだよ」と教えています。ミズカマキリ、オタマジャクシ、クモなども捕まえる児童もいました。最後はズボンも

シャツも泥んこになっていました。東北農林事務所職員、布沢集落の住民など総勢37人での大田植えでした。



▲小学生と一緒に田植え

9月稲刈り・はせがけ

「稲を束ねるのはむずかしい！」

9月19日に稲刈りです。夏の高温が続く、コガネモチなので早めの稲刈りとなりました。最初に田んぼの校長先生から、けがをしないように鎌の使い方を教えてもらおうと、ザクザクと刈っていきます。布沢集落の方から稲の束ね方を教えてもらいましたが、うまく束ねることができ

ないようです。前日に集落で「はせ」をつくっておいたので、稲束をかける児童、稲を刈る児童、悪戦苦闘して束ねる児童に分かれてがんばりました。

「田んぼに吹く風が気持ちいい！」と稲の香りを感じる声が響きました。



▲稲刈り・はせがけ後にみんなで

10月脱穀

「千歯きき、足踏み脱穀機は楽しい！」

10月19日に脱穀です。明治時代まで使われていた千歯きき、大正から昭和時代の足踏み脱穀機、昭和から平成のハーベスタと3台の脱穀機が並びました。

千歯ききは大東ではなかなか引けないようです。「小束にして少しずつだよ」と声が掛かります。足踏

み脱穀機は足で機械を踏みながら手で束を入れるのでこつがいります。でも慣れてくると「こりゃ楽しい！」と何度も並んでいる児童もいます。

ハーベスタには、はせからどんどん乾いた稲を運んでいました。

12月大収穫祭

「自分たちでつくった米がうまい！」

12月15日、あいにくの雨になり東和小学校の給食室で餅つきと豚汁をつくりをしました。5年生も臼と杵を洗い、いよいよ餅つきです。「杵が重い」と踏ん張ります。東和小学校校長先生の餅つきは腰が入っていて拍手でした。豚汁づくりは白菜や人参、ゴボウなど野菜切りも



▲協力して餅つき



農地を売りたい、貸したい
(農業経営規模縮小)方は
農業委員会事務局まで
ご相談ください。

お問い合わせ先

農業委員会事務局(市役所2階)

☎ 55-5148

FAX 22-8533

現在あっせんを依頼されている農地

◇売りたい・貸したい

所在地	地目等	面積(アール)
竹ノ内	畑2筆	4

農地の売買や転用許可申請手続きはお済みですか？

農地を農地以外の地目にする場合や、売買などの権利の移動には農業委員会の許可が必要になります。事前に農業委員会事務局にご相談ください。

転用完了後や非農地証明による地目変更登記はお済みですか？

転用許可を受け農地を農地以外にした場合は、速やかに地目変更登記を行ってください。手続きが行われていないため、後々農業委員会事務局に相談に訪れるケースが増えています。

全国各地の今の話題が満載

全国農業新聞を購読してみませんか？

農業に関する情報や地域の話や経営と暮らしに役立つ情報をお伝えします。

○発行：毎週金曜日(月4回発行)

○購読料：月額700円(送料込み)



※購読申込みは農業委員、農地利用最適化推進委員
または農業委員会事務局

**農業委員会への届出は
お済みですか？**

- 相続(遺産分割・包括遺贈を含む)
- 法人の合併
- 時効取得等

により農地の権利を取得した場合は、相続等の届出をしてください。



広報委員会
委員長 松本 太
副委員長 佐藤 孝
委員 大内 和長、武藤 栄利、菊地 清吉、安齋 浩一、石川 重彦、佐藤 洋三、遠藤 康子
会長 オフザパー
会長職務代理者 奥平 貢市、野地 太郎

編集後記

農業委員会の中立委員として参加して数年経過し農業に益々興味湧き、昨年4月から遊休農地を約80坪借り、素人ながら家庭菜園を始め、いんげん、トマト、ナス、かぼちゃ、里芋、枝豆等多品種を栽培しました。シャベルで畑を耕すことから始まり、肥料まき、草刈り、炎天下の中の水くれ等大変ですが、全てが新鮮で仕事を疲れなくても畑に通い続け、今は春にも収穫出来るよう、玉ねぎニンニク、らっきよも植えました。また肥料、草刈り機、水タンク、鍬、マルチ、支柱等購入にお金がかかり、野菜買ったほうが安いと言われるのが、野菜が嫌いな私でも自分が栽培したもの美味しくいただけの楽しさを体験したらもうやめられません。春には何を植えようか今からワクワクしています。

松本 太